

「かんぱうい!!」

「今日の仕事も
大成功だったわね
旦那さま!!」





ランドソルから
遠く離れた西の
砂漠にある国
サラサリア。

その郊外で『仕事』を
終えた二人の男女が
宿の一室で
祝杯をあげていた。

少女、サレンはどきりと
無造作にベッドに腰を下ろすと
ジョッキを手に取り
それを一気に呷る。

口から酒があふれて胸元に
垂れるのも気にせず
ゴクゴクと喉を鳴らして
飲み干した。

「ふはー……
おいし……♡」

唇の端から垂れた酒を
舌で舐めとる。
以前のサレンでは
ありえない仕草だ。

風呂上がりで
一糸まとわぬ肢体からは
ほのかに湯気が立ち上り
赤みを帯びた肌を汗が伝う
その光景はなんとも
艶めかしい。

「へへっ、ガキだから
飲めねえとか
言ってなかったか？」



「もうさっさと話してるのよ」

「今思えばあの頃のあたしは
どうかしてたわ」

「お酒も“お仕事”もセックスも
気持ちいいことはぜんぶ
あなたが教えてくれたんじゃない♡」

「エレガントがどうだの
清貧がどうだの……
あはっ、ほんっと
くっだらないわよねえ♡」





かつての自分を嘲るように
ケラケラと声を立てる
品のない笑い方が
すっかり板についた少女の変化に
男は背筋が震えるほどの
言いようのない興奮を覚えていた。

魔神の少年に歪められた
サレンが男と行動を共に
するようになってはや数か月。

繰り返される暗示と
男の与える快楽により
サレンは身も心もすっかり
盗賊の妻にふさわしい女へと
変貌していた。

悪事に加担していたことへの
罪悪感で苦しんでいた少女が
今では盗みで得た金を
着に祝杯をあげる
立派な悪党に様変わりだ。



サレンにもたらされた変化は
内面だけではない。
白磁のように透き通っていた肌は
砂漠地方の灼熱の太陽にさらされ
すっかり褐色に焼けている。

（どうせおっぱい始める時には
外すってのにご苦労なこったぜ）

風呂から出て事に及ぶまでの
この一瞬の時間のためだけに
装飾品を身に着ける感性は
男には理解できなかった。

自分色に染めているつもりでも
女は女ということなのだろう。

身だしなみに無頓着ということは
決してないが、清貧を旨とし
派手に飾り付けていなかった以前とは違い
耳には大ぶりのリングピアスが光り、
胸元には金装飾の高価なネックレスが
飾られている。

男の視線に気づいた
サレンは妖艶に微笑んだ。

「なあに、やらしい目。
そんなにこれが気に入った？」

サレンはゆらゆらと身体を揺らす。
その動きにつられてちゃりちゃりと
軽い金属音が鳴った。

音の発生源はサレンの
豊かに膨らんだ
胸の先端に付けられたピアス。

高価な宝石をぶら下げたそれは
紛れもなく「そういうこと」のためだけに
女体を飾り付けるものであり、
その持ち主が快楽に身をやつした
あさましく淫らな女であることを
如実に示していた。



「ああ、最高に似合ってるぜ。
サレンのエッロい身体にぴったりだ」

「ありがと♥
それじゃあ……」

サレンが身を寄せてくる。
硬くなった肉棒をやわやわと
撫でさすると耳元で
甘く蕩けるような声で囁いた。

「んふ、かたあい♥
今日もこれであなたの
エッロイ奥さんをたくさん
啼かせてちょうだいね
旦那さま?♥」





ズン

「んっ…それで…ねっ。
その男がちらちら胸見てくるから、あんっ♡」

あ

「んで、そいつ気絶させて
財布を頂戴したっつうわけか。
ははっ、とんだ悪女サマだな」

「やあん、おひねりみたいなものよ。
んあ♡ ま、案の定シケた顔にお似合いの
シヨボい小銭しか入ってなかったケド♡」

ズン

ん

ん

ぬ

ぬ

「んう、ちよつと胸元の布めくつてあげたら
鼻の下伸ばして近づいてきてえ♡
あはっ、あなたにも見せてあげたかったわあ
あの間抜け面♡」

ん

「ひっでえ女だなおら」



上では言葉を交わしながら
下では腰を振りねっとり
押し付けるように
お互いの性器を交わらせる。

すでに何十何百と繰り返された
動き故に淀みはない。
お互いの感じる場所や絶頂に
至るタイミングなどはとうに
知り尽くしている。

故に激しくするよりも
お互いの快楽を
調整しながらゆっくりと
段階的に快楽の位階を
高めあっていく。

さながら
良質のワインを味わうように
性交の生み出す悦楽を愉しむ。

気心の知れたパートナー同士だけに
許されたスローセックス——。
いつからか二人はその種の性交も
楽しむようになっていた。

「んっ…ねえあなた
次の仕事って、あんっ
決まってるのかしら？」

「ふふ、なら、んっ…
ちようどいい話が
あるんだけど♡」

「あん？
特に目星は付けちゃらねえが…
それがどうかしたか？」

「くさっ」

「この間サラサラア王家の
国王派と傍系の派閥の後継者同士が
婚約するって発表されてたでしょ？」

「あら？
ならますます
ちやうどいいわね」

「ああ、随分長いこと
いがみ合ってたらしいのにな」

「町人共が浮きたってやがった。
まるでロミオと
ジュリエットみたらしいいな」

「けっ、気に入らねえな」

「ふふ」

ぬち♡

ぬち♡

んふ♡

んふ♡

んふ♡

ざちち♡

あん♡

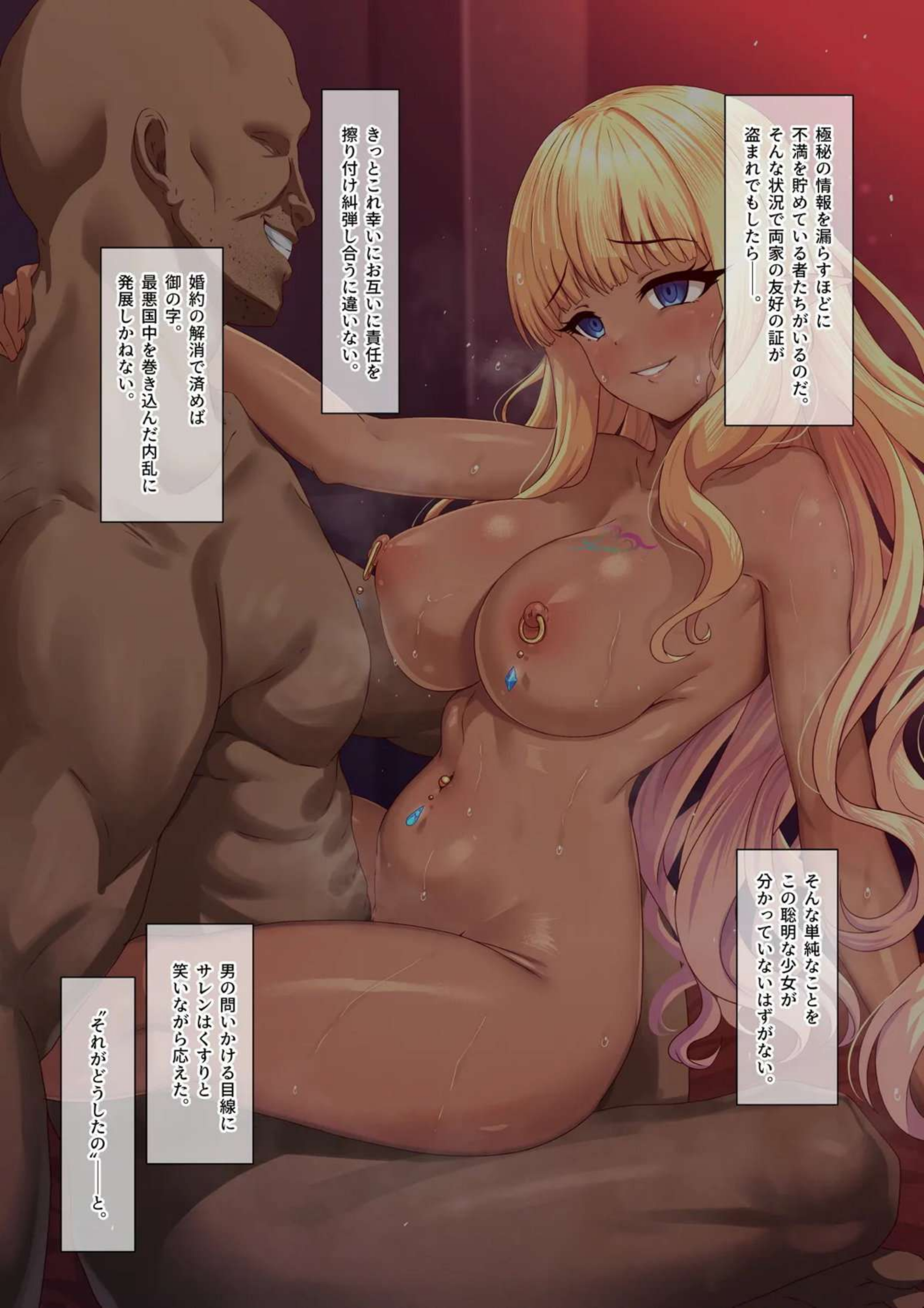


「ご存じの通り両家って
不仲が続いてたわけでしょ？」

「だから両家の遺恨が
残っていないことを民衆に
示すために引き出物として
両家のおききの魔道具を
お互いに送りあうんですって」

「魔道具の発掘で有名な
サラサリア……
その王家由来の
とっておきの魔道具……
ふふふきつとすこい
お値打ちものなんでしょうね？♡」

「おいおい
お前まさか……」



極秘の情報を漏らすほどに
不満を貯めている者たちがいるのだ。
そんな状況で両家の友好の証が
盗まれてもしたら――。

きっとこれ幸いにお互いに責任を
擦り付け糾弾し合うに違いない。

婚約の解消で済めば
御の字。
最悪国中を巻き込んだ内乱に
発展しかねない。

そんな単純なことを
この聡明な少女が
分かっていないはずがない。

男の問いかける目線に
サレンはくすりと
笑いながら応えた。

“それがどうしたの”――と。

ぴんぽん

「んっ、最近あたしたちも
顔が売れてきちゃったしね」

んおっ

「これからこの国で
やってくにしても
どこか別の国に
お暇するにしても…ね♡」

ぴんぽん

んおっ

「ちよつとくらい
国がめちやくちゃに
なってくれた方が
都合がいいのよ」

んおっ

ぬさ

ぬさ

ぬさ

ぬさ

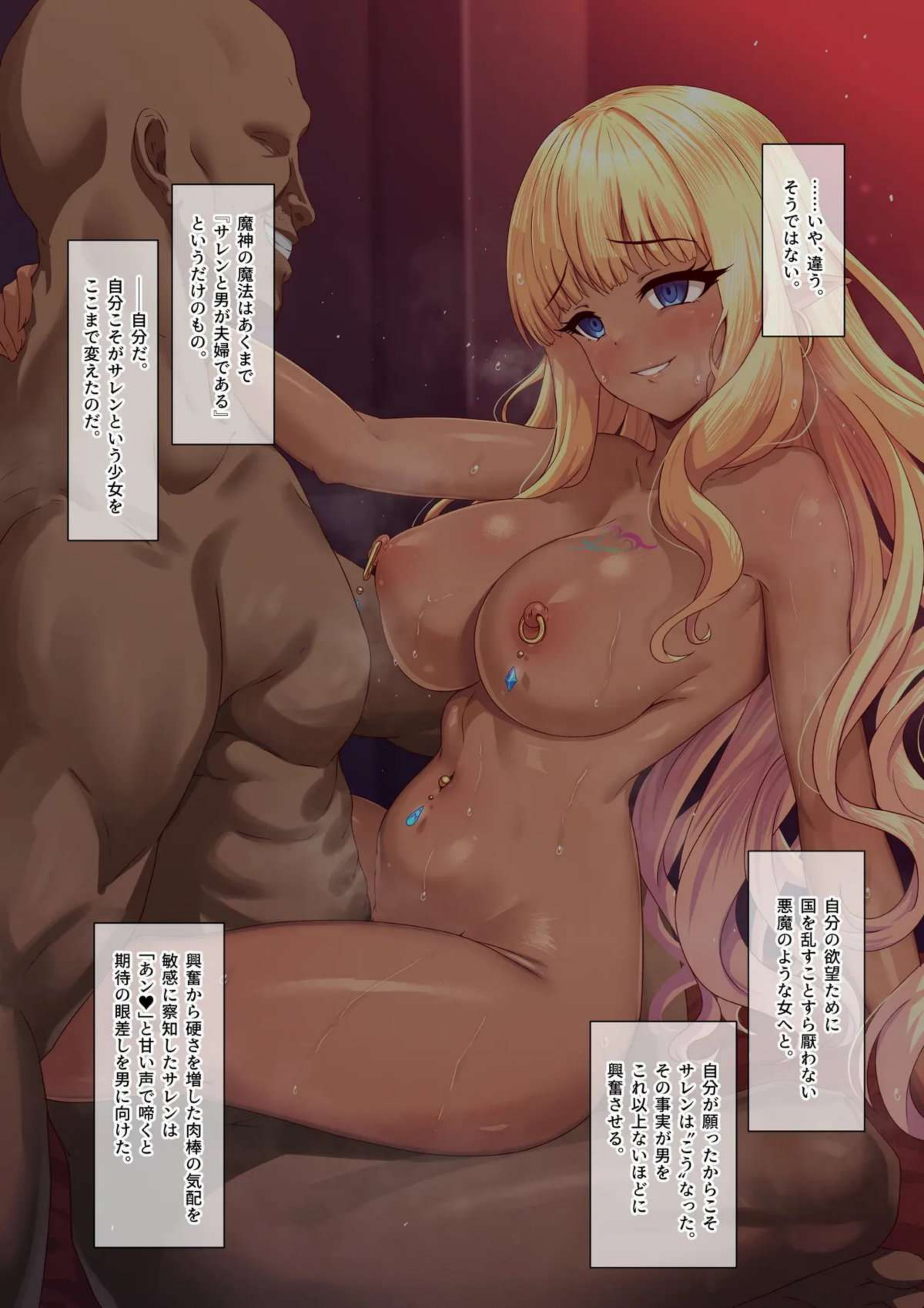
「……」



サレンの言葉を聞きながら
男は震えていた。

これがかつて自分を
捕まえた正義感に溢れた
少女なのだろうか？

魔神の魔法はこうまで
人を変えてしまうもの
なのだろうか？



……いや、違う。
そうではない。

魔神の魔法はあくまで
『サレンと男が夫婦である』
というだけのもの。

——自分だ。
自分こそがサレンという少女を
ここまで変えたのだ。

自分の欲望ために
国を乱すことすら厭わない
悪魔のような女へと。

自分が願ったからこそ
サレンは“こう”なった。
その事実が男を
これ以上ないほどに
興奮させる。

興奮から硬さを増した肉棒の気配を
敏感に察知したサレンは
「あ〜♥」と甘い声で啼くと
期待の眼差しを男に向けた。

「ふふ、やる気に、んあっ♡
なってくれたみたいね♡」

「なかつ…♡
すっごく
硬くなってるっ♡」

「…それじゃあ
最高の旦那さまは
最高の奥さんに
どんなご褒美を
くれるのかしら？」

「お前のお望みのものを
たっぷりくれてやるよ」

「ああ、やっぱりお前は
最高の女だよ
見てくれはもちろん中身もな」

「ああん、うれしっ♡」

「んはあ、すて、きいっ♡
きてえ、あなたあ♡
あた、しもっ……
もっ、いくっ♡
イク…イクう……♡」

ズン
ズン
ズン

「あっ……はぁ~~~~っ!!♡♡♡♡」

ズン

ズン♡♡♡♡

ズン♡♡♡♡

「びゅるびゅるって
熱いの来てるっ♡」

「これえっ……♡
やっぱり最っ高おっ♡♡♡♡」

ズン♡♡♡♡

ズン♡♡♡♡

ズン♡♡♡♡

ズン♡♡♡♡

ズン♡♡♡♡

ズン♡♡♡♡

ズン♡♡♡♡





「ん...
あつたかい...♡」

はぁ...♡

はぁ...♡

はぁ...♡

はぁ...♡

ん...♡

はぁ...♡

はぁ...♡

はぁ...♡

はぁ...♡

はぁ...♡

はぁ...♡

はぁ...♡

「ん……♡
ふふ、もう協力してくれそうな
連中の目星は付けてあるの。
稼ぎも大きい話だから
結構な数が集まりそうよ」

「数集めて襲うつつうわけか。
それじゃあまるで
盗賊団みてえだな」

「じゃああなたが
団長様かしら？」

「どうもあらや!!
じゃあお前が団長様
お気に入りの
情婦つつうわけだ」

「やん、情婦なんて……♡
とつてもいやらしい響きね
……あたしにびつたり♡」

「へへ……
面白くなつて
きやがったぜ」



投獄され刑の執行を
待っただけだった自分が
いつの間にやら盗賊団の首魁。

まったく人生
どう転ぶか分からないものだ。

富、繁栄、地位……
自身にあらゆるものを
もたらしてくれる女を
眺めながら男はくつくつと笑う。

（もう取り返すつかねえよサレン。
例え魔神の魔法が解けたってな。
お前はもう魂の底の底……
根っこの部分まで悪党に
染まっちゃってたんだ。だから――）

精々堕ちるところまで
堕ちてらっしゃいませ

愛しい愛しい俺の悪女様♡



コノ者 コノ頃
サラサリアヲ
乱ス 盜賊ノ
一味 ナリ

詐欺 強盜 殺人
悪鬼ノ如キ ソノ所業
筆舌ニ尽クシ難シ

生死問ハズ

情報 求ム

捕ラエシ者ニハ
金一封ヲ授ケル





























